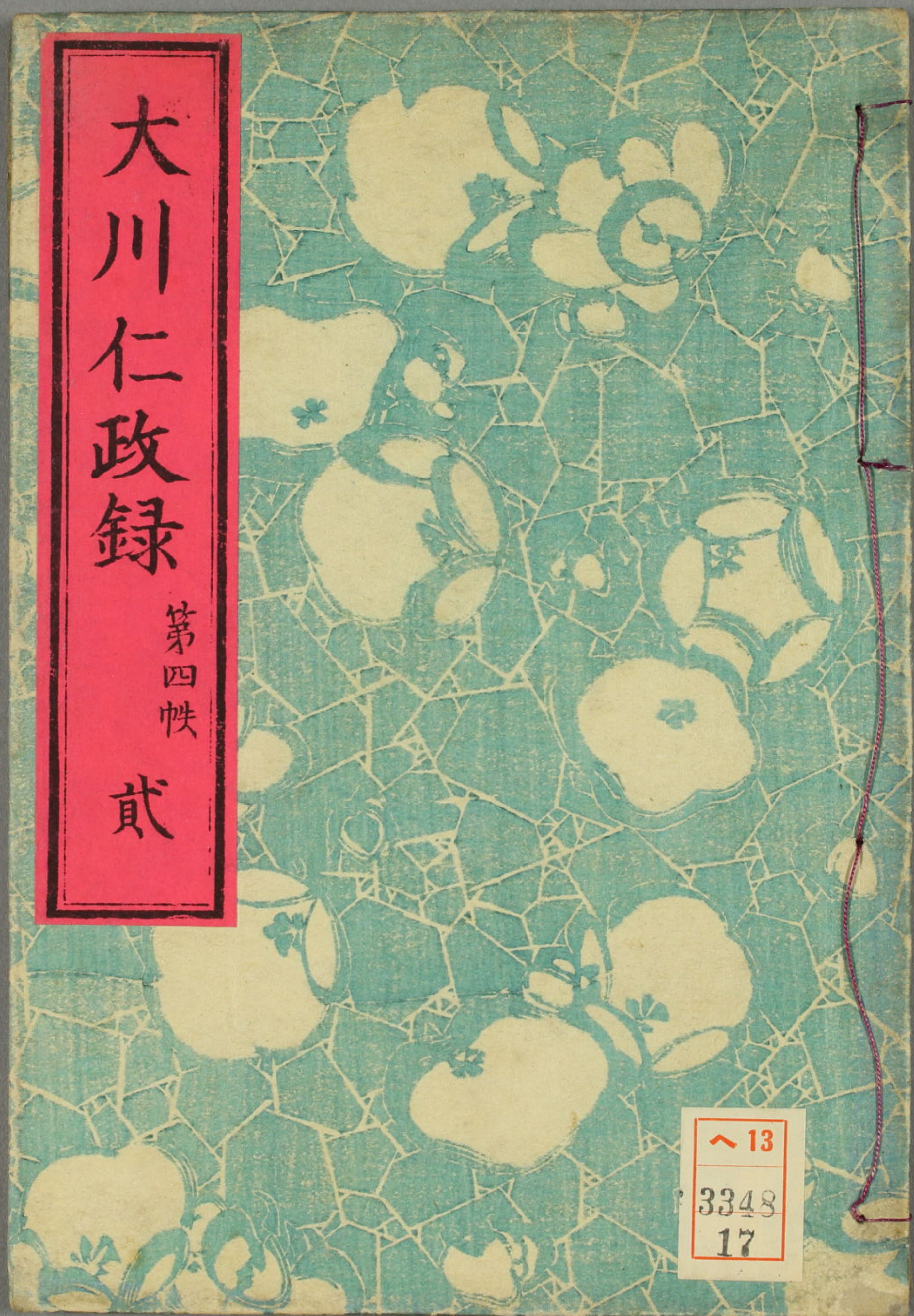




大川仁政録

第四帙

貳



~ 13
3348
17



3348
17

近世美談 大川仁愛録 第四輯卷之二

松亭主人編次

書諾余人 釀災害

欺計 廢人 塞忠 諫

大正十年八月廿九日
本大學出版部 贈

第三面

佛祖三經小浮屠子の曰愛欲を絶する甚しきはと再説都築主水
を思ふばも白糸小馴深便りあると身の上と聞て不便も弥増始の程の
折々行く安否と問をどしとる小白糸の元より誠と頭一逢たる故主
水も今の捨難き思ひありしとる妻小雁鳥が前よりさふいひは「通ひ路
の足も志なく度重あるは後ひとつら深き中とけり水も洩れ
まどとて契りたるを去るは自亂も障る支ゆつてや久敷素玉の

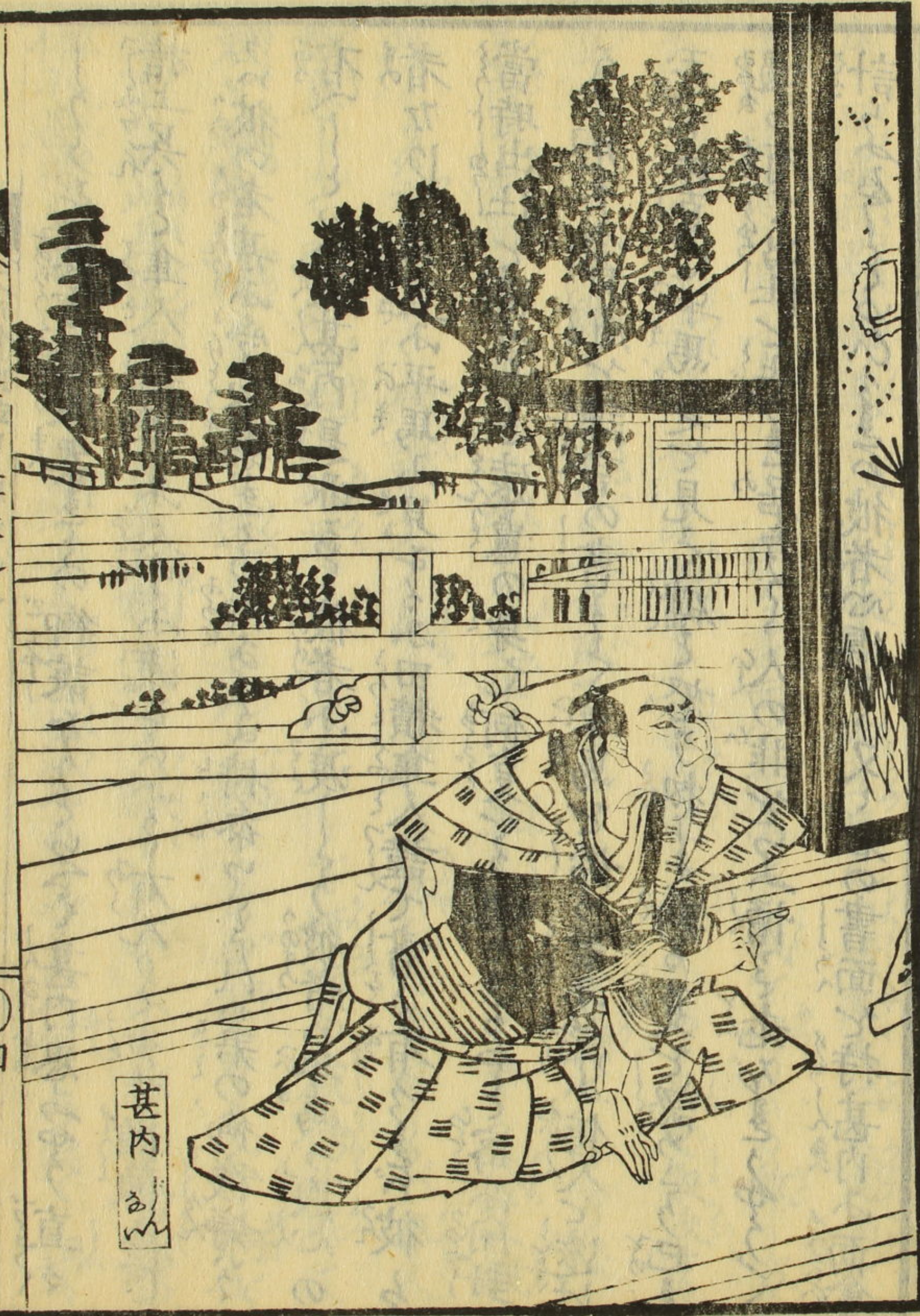
大川仁愛録 第四輯卷之二

さしうべ扱ち白糸が強面うりしゆ思ひ切し玉ひしあやと心小うら
るび居るうし小白糸が方より急小物語度言ゆりし申来るれど
何言よやと早速行く様子と尋る小昨夜又自亂ゆの来ませ
しと我身俄小病起りしと偽り此身のゆえ奉らざ人せ以て如此
々々といとせし小平馬と中つる人の我身の臥房へ来り何故君の
御心小後いざるとの言あるまは事と分とさるごとくと聞訊あり我
いひ出ぢし言聞入り連其終止まんや身と贖ふと連行は活ん
共殺さんとも此方の終なりといふと出らりが亭主と呼身と贖ふ高
議とあり飯りしまは頭と此身と贖ふ連行へしとゆゆんよ其時
アを覚期さるる侍まで去る時ふの你と契り泰らせし言も仇と

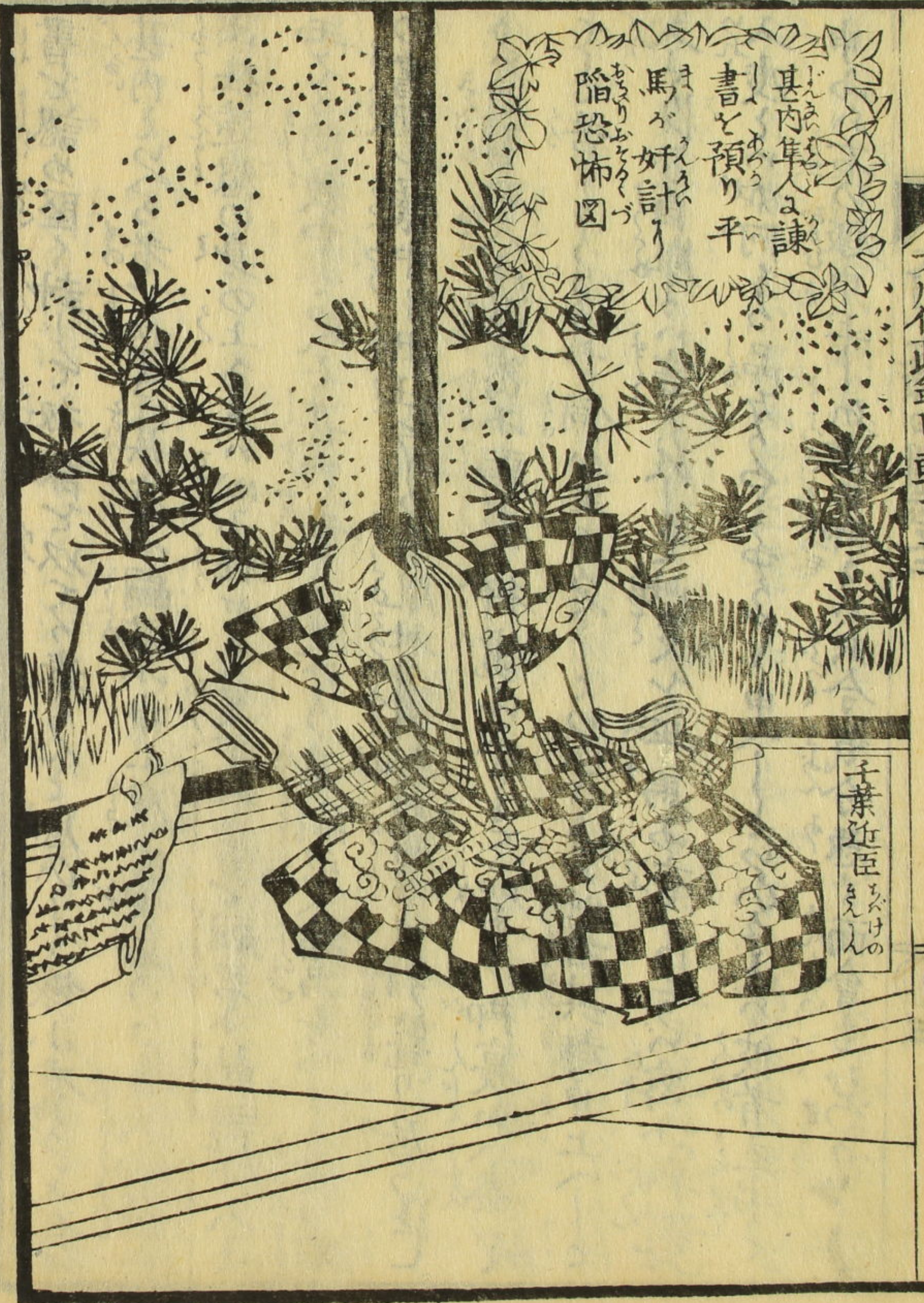
たりゆくま此言直々物語り度態々呼参らせしとて扱ちさる
言有し我も又其方小約し事しゆまは你の下総へ行と知る人
負しと見ていおし若速小身と贖ふと連行人といふも何と成
とも偽りて頃引延し玉へ我来りし高議あるとゆゆ我家へ飯り
妻小鷹小のちや兼と你もいひし如く我白糸小別添し自亂君の
彼が本へ通らせ玉あて止んが為し然らば昨夜又未玉ひし小舟嵐
手馬僕小来りし如此々々の言なり平馬君と諫る迄しをなく共
過と助けと重過さん言中いゆる世の諺も好言門と出で悪言十
里と走るるといふ其如く有んよ風説世上へ聞へる事をあは
左中りの言鎌倉へ聞へる時自亂君のいふ小成行玉を人も知るべ

うづ其時外小嗣君不立べと公達もみし夫と知つて去る支云
平馬が心底こそ心得孫老臣達も知らずや居らん親人の出仕と
苗の遠慮の身もまじ可為やうも有まじ共余知不見人の不忠
委細のやうも你行く申べと一封の書と認め小鷹小渡せ小
小太郎と伴ひ総州へ行牟人の方へ至り夫の書状と出して委細の
子と物語りまじ牟人聞て大に驚き先頃五十子なる定正ゆと
俱小武州小狩し玉ふとつまむの聞けり夫より外の支は何支の
ど老臣共も左やうの支の知らざると見へり諫め奉んも我遠慮の
身もまじ叶りん去連捨置るべ諛佞の族恣小君を惑し我意放湯の
益暮らん病の根深くあはる内治をぞんばあまうとと思案して諫

書と認め堅く封じて扱誰と以て奉らんと思ひし嫁小鷹の又
甚内とける者と招き某密小嗣君不申上度一毛あり共當時ハ
出仕遠慮の身の上ある心小任せを足下此書と嗣君小南詭小入
玉くる間敷やといふ甚内安き度なり某嗣君へ指出をへし翌日右
の書面と懐中し出仕し自胤此日風邪の由り引籠り居らば
うの近習の人小某密小嗣君へ御讃小入と品あり御寝知へ茶
ても苦うらうらや伺ひ玉くるべしといふまじ此者其趣申上べし
入りしが自胤の言まじく此度と平馬の言りし密小御讃
入度とい如何なる品なりやう申へといふまじ彼者立出
申あ右の趣申上りぬ君の仰るに只今気分悪く面會もじり書



甚内



甚内年々諫
書と預り平
馬が奸計
陥恐怖図

千葉近臣

しうしうぞ其方受取泰まとの御誼なりとて其内思ふや直々
指上呉も隼人が頼し小人手小渡をいへる有んくか猶豫をせ
ふ彼の者其小受取泰まとの仰あつた持泰つとていひ君の御機嫌
有べしとて故甚内是非多く彼者小渡しう彼者平馬が腹心の
者なりしう直小平馬小見する小田積隼人謹て書と有るまは彼ら
當時出仕と留めらるる遠慮の身し何更とて認めらるる密小用封
るし見らるる自胤と諫言の書しう平馬と始め君小諂ふ倭人と遠け
玉への更く平馬是と見く確と怒り扱ふを斯る更と認めらるる已
過ち有て出仕と止らる居たり人の非とて憎ま老をさうやうく
計らるるといへるまは彼者心得く又右の書面と持甚内小面會

な早速我君へ御讒小入し殊の外御立腹し田積隼人已に思有て
出仕遠慮の身小有なり斯る書面と指出て我と侮りたる致し方
不好千万なり此度申せよの仰しう甚内連も此やうある品と取次す
更やめつと貴殿まぐ甚と不首尾なりといひく彼書面と見せらるる
甚内赤面し其座と立ち其非なく隼人方へ行さるる入手へ渡
せし言どし御讒小入し外さうくの仰しと申せらるる隼人
歎息しう嗣君左程の暗君とていへるが奸倭の族傍小在て
君と晦とて覺たり是と遠ざけせん諫るとも甲斐なうとて何と
あさん此身遠慮の身ある施とて謀りはいふとて當惑の
体小甚内と氣の毒小と思へとも已に覺あるまは何とてと詞も

なく暇と告ぐ立出たり一休の甚内も愚直なり其性鈍き故
平馬小計らきて斯る更と引出たり叔又五十嵐平馬ハ備木甚内と
欺る軍人が諫書と見く大い小驚と彼逼塞の身小有なり小
くくやうの事と聞出りえ何れもせよ彼わんあ我ら大望の
妨ありと此更と又平太夫小語り今宵ひそく彼が宅へ忍び入り人
志は殺害するべし倅且の追放し彼が家の没収とあり然る時ハ御
朱印の紛失も彼が罪とのよし後ろ安き道理なりやと有人と云ハ
平太夫聞て此藩中小我ら姑ともなる者ハ榛兵庫と田積軍人の女
なり彼ハ兩人と計らんあ兼くの望も成就するまは汝が申れ勿論
宜しと共若仕損するも毛と吹く疵と求る小とくどや兼忍小更と

み難く去連彼我々又子と怪しく心付さん其終捨置んも心掛り
なり幸ハ今日日本更津なる赤回源左門方より海松杭の松蔵とつらりの
用更有て来り逗留ししより彼ハ此藩中小面と見知りたる者ゆゑ
見咎めらる共已まら口より白状せざる誰も我ら刺客と心付者ハゆ
さ共海松杭一人の働う及とさへ汝も俱く行くやうく計るべし
若又仕損さんあ引くと肝要と心得べしと委細小申合々ま平馬
剛く海松杭を先連れて鈴が森とての働とら心利する者あまは仕損する
更ハあつとと海松杭と吹出り一部始終と物語仕負せさんあは
とて五十兩の金子とさんとあ欲小目のあ悪黨者の癖あま一
義も及ぶ義諾あり其心構とる一時の来ると待居り頃ハ早

月も中旬過の夏あはしが夜を早亥の刻も過あんと思ふ頃平馬海松杭
の兩人の面てと包く身軽不出立密小己が算宅と立出て田積の算
中の邊り不至り様子と窺ふ内をひつそと静りこ門番の軒の音
折く聞ゆのさかろるま六時分をうと裏手へ廻り用意をうたう
指子と取出し庭と思ひさ如の塀小打掛海松杭先へ忍び入ま六續ひく
平馬も忍び入彼如此所と窺ふ戸の透り燈火の影の移りたる隼人
う寐如る爰ふあんと静小雨戸と明見る小宵小締りと忘ま丁うや
するくと明をまひ音せぬやうと忍び入障子と冷と押明まへ一張の蚊
帳釣あり海松杭先へつと入りやうり蚊帳の釣手と切て落し上り
一刀突込りまよ何の音もあく人の居り共見へまよのへうふと

驚く内曲者待とつ声の屏風のあるふとくまはるあこの二人の徹肝と
して扱隼人が早知と彼方小用意の準備あり見届くまはる其中小
逃出んとする如く屏風掻遣り出ると隼人あめく九十余り老女を
腕差小腕小へ込で逃とぬ行粧し海松杭思ふ此奴の隼人が妻
なめ極くとも女なり高の知まはる夏あまを隼人を何方小居るゆんと
底気味悪く思ひまはる物もいふ打かまはる飛鳥を腕指扱とる
二打三打戦ひ海松杭が打た刀受流して拂のけ返を刀小肩先四五
寸切下り海松杭の叶りと庭へく逃出まはる飛鳥は已まのぼじと
追行り車馬の始り仕損ぢと思ひる隼人の今小出来んと飛
鳥へ海松杭小任せ置傍り目と配り扣へはる隼人の出も来らば

て海松抗の手を負ひ逃出を飛鳥追来らるるまへかりしに後より袈
袈ふらるるを切下り何れ以てあるべき不意と討まき飛鳥を其
まゝとつと倒れを果つとく止めを刺し海松抗の此体を見て取て
取らて平馬声も迎む支のあつたまへ早く逃れしつみ故小海松抗
其後小始り忍び堀の本に至り繩指子小取付て堀へ乗まへ平馬の禿
鳥小留りとは引退んと思ふ如此物音小家内へ驚き女子共を手燭
携へ出まじり此有らぬと見て声入出ど次の間逃出まへ平馬は早く
繩指子の本に至り堀へ乗り海松抗諸共表の方へ下り立ちし折折も
堀の外面小供人兩人召連らる立派の侍来掛り待し声かけ平馬が刀の
鐙ととくへ折柄月の雲隠し物形色の分らぬと聲音正小

隼人あらるまへ平馬は又も仰天せしあち大支しと思ひし鐙
取りまし刀を抜らぬ後ろと拂へ隼人の取ら手と放ち身を替り
其間小平馬は又も仕損じて災を引出んらんと逸足出りて逃行と
引捕んと追行ばすと打ら手裏釵小隼人へ早く身と附け跡小逃
海松抗が二の腕へて打込ら此間小平馬は逸散小何地もわ逃ゆと
ら海松抗は其始り早く道まんと思ひ如隼人が供の若黨が後より
抱甲ら振切んと揉合ら禿鳥小切ま手疵痛と働き自由あるん
道ま兼ら其烈平馬が打し手裏釵と二の腕へ受留ら既小主捕
らるは如小忍び出立の一人の侍小陰より頭を出抜まも見せど海松
抗首宙に打落しら田積主後の驚ひく折角捕し曲者と首討夏

中のある麻忽と吐く中彼侍は足早ふして去る是れん五十嵐平太
夫たり兼く平馬小言合め置る共更ふ望んで誤り更も有んり
忍びて外面小窺ひし果して海松杭橋成りて扱て海松杭が首
討て跡小愁ひる残るる此日隼人が備木甚内が故りて情思ふ
又嗣君の事此終小捨置る此上いり更の出来せんも計らまは責て
りの更ふ老臣の耳へ入置ると思へども外くの人の頼も甲斐かまど
しも榛兵庫あつて夜ふ入る密ふ兵庫が宅へ行對面とを委細の更を
物語り閑談數刻ありて深更ふ及び歸り来り扱て更ふ及べり隼人を
早速内ふ入見る家内へ上と下と混雜して馬の漏ふ異ふるべいり小
せしやと問ふ内君の何者小中討まは白玉ひりり故驚るて行見

る小妻飛鳥の止めを刺し切ら居りいりある子細ごと問ふあはるく
皆申中り宵小内君の仰ふ今宵も御飯りの程も遅く人問我身を御
帰迫待てさち共皆くい卧るの仰ゆ皆く休申候勿物騒き
音の聞へ候へ何更もやと泰り見らふ内君いよや討まは居玉いと
し故かりせ今この曲者いりも取逐を回敷を斯く知らは故追捨
小致しり折角捕へし曲者も死人小口な様子志まべいりやと詮
方なく此趣老臣方迫訶へ伴主水方へも申送りまは主水の又一双の
愁と増て喪ふ籠りてぞ居りり々々

第四回
倭者及問苦清士
二婦之誠情俱死



平馬飛鳥と
討て飯路軍
人よ出會海
松杭落命の

海松航の

隼人

大川正金四郎



平馬

8

平太文

大川正金四郎

驚い聲妙なるが故に籠るる花の色深きが故に枝と折ると橋本屋
かる白糸の己まが智めりしりて自亂し思ふと今に却て其身の仇と
いふ今日や黄金と持して身と贖ふまらや明日や下総より人まら
うと心苦しく鬼やと斬り斯や甘きと心と痛め夫に付てと主水の
別々折る我又跡より来りて商議あるといとまら其後音信あるに
といふ小志五ひかる夏と知りまらまら夏の有る物と今更
変らせ玉ふとていめいと思へど頼と難と人心まら若去る夏も有る
此身一ツ兼てしも覚期あり居る夏もまら恐しとも思ふ孫ども左も有
あ誰が為ふ貞操と守り身と殺して誠とまら却て人の物笑ひと成
るん杯流石女の心まら越方行末と案ト思ひ細り居るに如く主水

方より文来りていづれ物語りの夏はいふ成りや我其後尋ねぬや
思ひに如く此くの夏より母の喪ふ籠り居るに餘の本へも行夏成に
去と共平馬が方より身と贖ひ未だなる早速知らせ玉りてとぞ書
くりたる白糸見ると扱ひ去夏より有つるそまら知らば女心の浅く敷
りやと人と疑ひし夏の罪深きよ夫とて未玉ぬ苦し母御の横死
る思ひもよぬ夏なる忠孝深き玉水の夏の夏もまら其歎と無有んと
心の中の推量らまら痛りく其夏をしも思ひ見まら此身の苦勞の物數
かむに活る共死るも此身一ツの事ありと自ら心を勵して待居るまら
千葉家うてい榛兵庫軍人が内意に依り金銀出入の官司方へ嗣君と
ころ臨時入用の美申来らる此方へ相届るまら一申遣置るまら官司此

赴と申す、小依て須くは、支延引不及び、又幸平馬の隼人と
討んと思ひ、小謀齟齬しく事あり、飛鳥と討一の、所不捕へらる
し、漸小道、海松、杖跡、小残り、うど、是と救う、暇あり、心安り、思ひ
平太夫が計らう、いふと、跡、小愁と、残らる、うど、功あり、いふと、平
平太夫申、今又急小計んと、せ、却と、災と、引出さ、べ、此度の隼人と、捨
置伴、且が在所と、尋ね、彼と、討べ、いふと、我強き、隼人なりとも
妻と、討ま、一人の子と、殺さ、ま、あ、哀悼の、為、小思ひ、と、費、物の、用、う、ち
立へ、う、く、殊、小、且、此世、小、在、る、御朱印の、詮、美、母の、仇、と、報、え、ん、支、と、忘
る、う、く、む、さ、子、ま、は、始終、汝、が、為、仇、と、ある、もの、こと、へ、平馬、実、尤、く、去、ら
且と、討、べ、し、其、在所、と、搜、ら、る、武、及、豊、嶋、郡、なる、麻、布、を、小、都、築

主水と、変、名、し、て、鍛、術、師、範、多、と、由、と、聞、て、其、迎、迎、へ、人、と、遣、し、能、く、穿、鑿、を
め、ま、相、違、え、り、去、ら、る、う、く、近、頃、品、川、ある、橋、本、屋、の、白、糸、と、ら、へ、る、小、馴、染、互、小
深、き、中、と、なり、此、頃、と、鍛、術、の、秘、昔、古、も、疎、小、なり、杯、噺、し、る、ま、は、其、者、飯、り、く
右、の、噺、と、平、馬、小、語、り、ら、る、ま、平、馬、聞、て、大、き、小、怒、り、白、糸、が、嗣、君、小、後、ら、る、い
主、水、め、が、め、る、故、あり、此、上、の、自、胤、小、誣、し、と、彼、と、討、ま、べ、し、と、思、案、な、り、く
密、小、此、支、と、告、て、白、糸、が、君、小、後、ら、る、を、彼、が、め、る、故、し、彼、が、小、あ、く、白、糸、の
何、条、君、の、御、心、小、後、ら、る、支、や、め、ら、る、ま、は、い、ま、ま、は、自、胤、聞、て、確、と、怒、り、彼
先、達、て、御、朱、印、と、奪、り、ま、し、時、切、腹、も、申、付、ら、る、べ、し、と、追、放、小、成、ら、る、い
一、つ、御、朱、印、詮、美、の、為、なり、然、る、小、其、支、の、余、れ、あ、く、去、る、行、状、と、あ、す、い
不、届、し、隼、人、小、此、支、と、申、召、飯、し、切、腹、申、付、ら、る、共、苦、し、く、終、と、然、る、を、時、の

我白糸が本へ通ひ事も知らぬまゝいふ事と申さるれば若丸
中に思召の某討らふ旨ゆりゆく致さへしと倭姫と云惑し平馬が
計らひゆく五十子近辺へ細作と入ま流言させたる都築主水と冬
浪人品川も橋本屋の白糸とらへる遊女ふ馴染金子ふ詰り盗賊引
利とある由の觸りくまへ一犬虚と吠く万犬実と傳ふと專其風
説とあふくる然しく自胤の使者とく五十子へ申送りたる御領
内小住居あて都築主水とらへる者元此方の家来あたら不埒とせゆるふ
つと追放申付し如追く旧悪露頭致し候ふ付召捕て糺明致し度候五
十子近辺の支ゆ捕手と指回驗し候も憚あまゆとを扣へ候此方
より人数と指遣し召捕苦しく候や其方より召捕御渡し下る

や若手小余の討捨らま候ては苦しくはる旨申送りたる然るに
五十子城内より此方より召捕相渡さる旨返答有るま平馬心小
悦い其左右を待居り都築主水の如斯くを夢も知らぬ妻小
鷹と又の本へ遣し置白糸が方へも文より委細申遣しのおやく母の
喪ふ蓄をぞ居りたる然るに又軍人方より妻小鷹を以て申越るる彼
白糸が贖身一条の棒兵庫が如此くの計らひゆく須く延引致さる
とも嗣君免有し思ひ捨らせ玉と内金と調達ゆを彼と贖ひ玉と
との手當の由是小依り兵庫が申へ所詮嗣君より先小白糸と贖ひ
出し何地へあり共隠しあひ詮方あり思ひ絶玉と此度汝小計らせ金
子へ兵庫方より送り遣さるるの更しと申越るまは主水の直地橋本

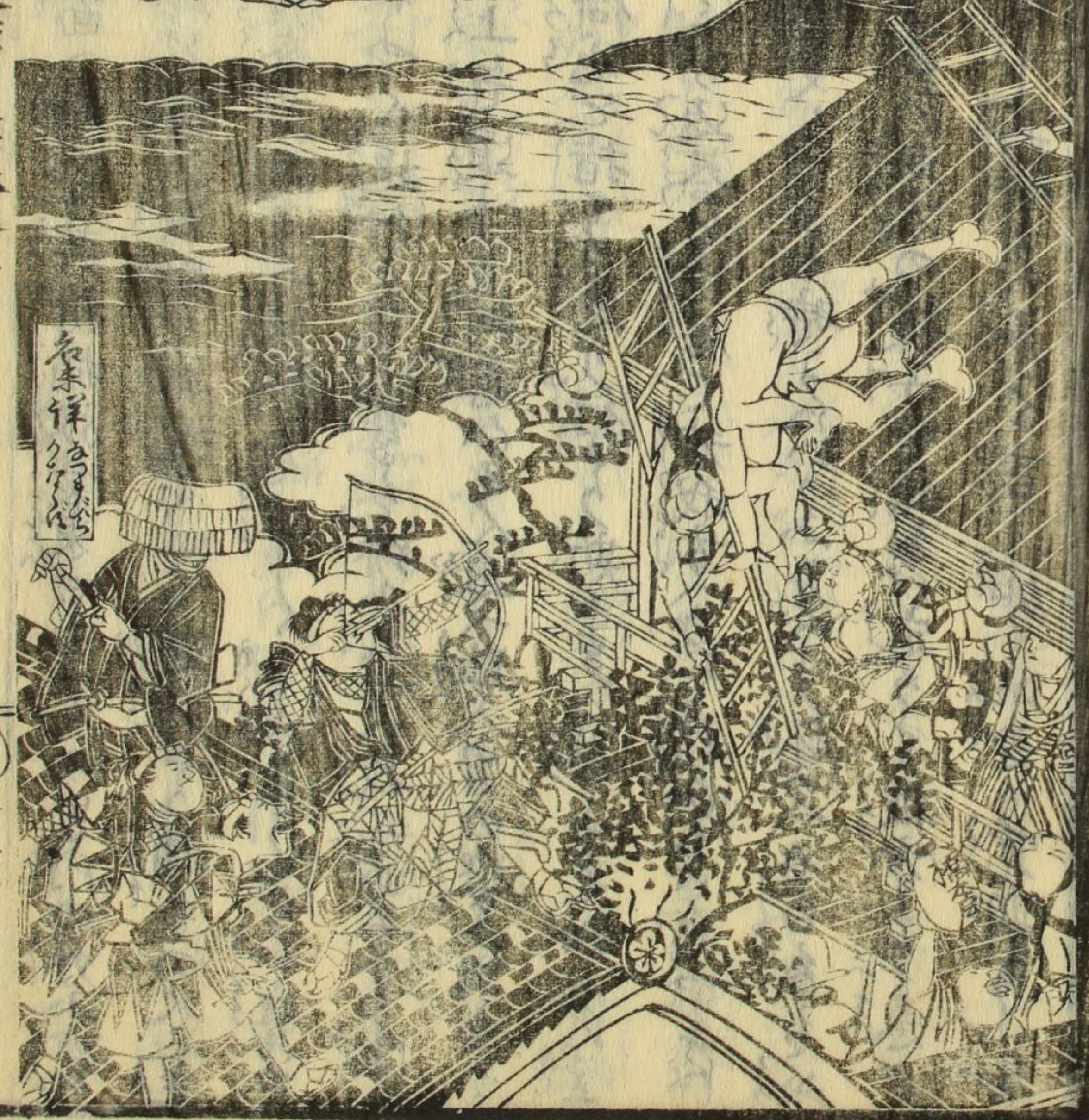
屋へ行白糸小其由と語り此度如何ゆべしと云ふ白糸は様平馬の
 方先約あるべし何と云ふ人知らぬも此家の亭主小應對あり見
 玉へといふ故亭主と呼び白糸を贖身ある人度と語り亭主は
 白糸が度い先日去る御方の贖ひ出さんとの事うと契約し印まで
 取りにおく候へば今更外々へ相談の致し難く去る其方より其
 後何とも便りあるまは一應右の赴相届け返答次第あり御相談申じ
 明晩迄返答兼御返申べしとの事ゆへ主水の白糸が本小ゆりて其
 返答と待居り然るに橋本屋の亭主へ翌日五十嵐平馬が方へ尋行て
 右の赴と申へるはつるべしと云ふ平馬聞て白糸が度は是れ此方
 身と贖ふ疾くも埒明くはれ我病氣うと引籠居り故延引及より

最早哉快くまは一兩日中金子指遣せし外小身を贖んとし
 ありある者なるやと云ふ亭主は都築主水殿と云ふ御方なり
 言ふまは平馬聞て其主水と云ふは元此方の藩中なりしが罪有て追
 放となり今浪々の身の上の中遊女を贖ひ出さる身の上ゆへ彼
 盗賊引糾と業とある由聞つるが相違は若其者小白糸を贖せある
 掛り合と成り連係の罪と受べし若た共知れぬ負しを容とほし
 居るは後日召捕ま白状不及び時必らば疑ひを蒙るべし威しられ
 亭主聞て然らんは是れ取り取り断りつるを歸とべしと云ふ平馬は
 中今更断りし共今迄客とほし居り度あるまは詮あるべし夫より
 其妻を五十子城内へ届け給ふ早速捕方来り召捕行べし然る時より

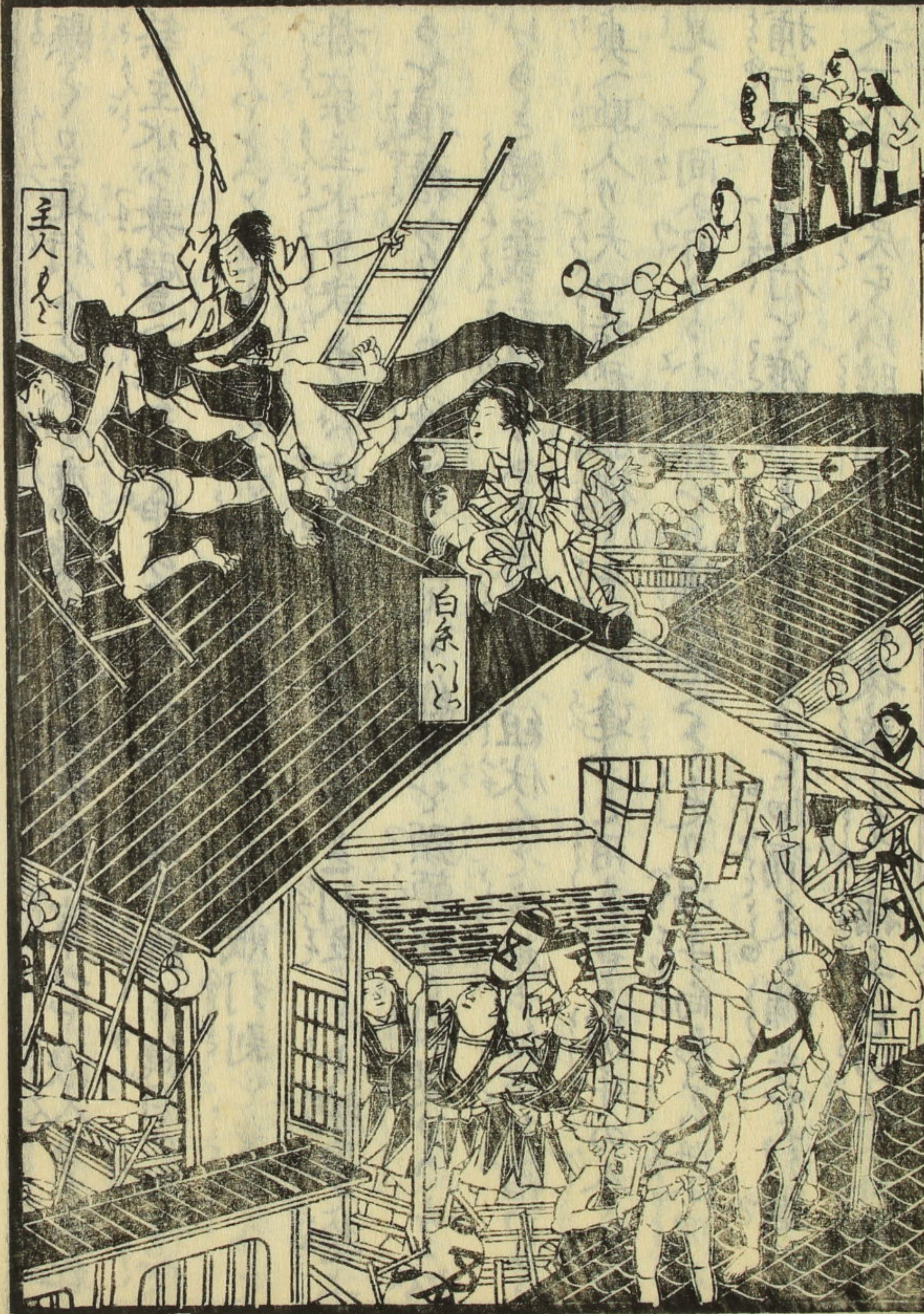
其方領主へ忠義とあり却て首尾するべしと欺きくまび亭主へ是
 と聞ていふ浪人の身の上く白糸が身と贖んとすふ心得と思
 ひ故平馬の跡金の夏と約定なりて取れ我家へも戻らうとて
 直池其卦と五十之城内へ詔へる茲ふ又主水の妻小鷹も昨日主水
 白糸が本へ行く飯り来らざらばいふせり夏あんと案し居る然
 案内もあ捕手の人へ入来り其方都築主水が妻あるといふも
 妾主水が妻あると然らば尋問さす細めり知縣の官邸迄来りし
 り小鷹のゆりゆり夫主水他出ると宅におもて歸宅あり右の妻申聞
 せ夫の指揮小任とすい汝が夫主水の品川ある橋本屋へ召捕り
 向ふら妻子も涙ふ召連来まで命と受て罷越へり異義ふ及はる

懸く召連行人とす小鷹驚き何故斯く宣る浪人ある共都
 築主水が妻譬へ領主の命あり共子細も聞ど眸と縄目の耻と受
 づらとくもめくど子細を胸にお覚ありん盗賊引剥と業とあり
 都築主水申訣あり官邸より申べしを引立しと小鷹取て檢上
 ると狼藉ありとす拂へば又一人が組付と頭顛倒と投退り女は似
 げも腕を裁大道とみと左右より組伏んと立掛くと下と潜つと
 真へ馳入り夫の指替腕扱と手込不逢と用意せり捕手の人へ是と
 見く一回小鷹と小太郎と小脇お抱へ走り出向あり此小兒召
 捕行ごと連行と渡すと追んとすると押隔支る捕手と引退れい
 又一人が引戻を以腕指とくとと抜放し支る捕手と切松小此間小

都築主人橋本
 橋の渡り
 の橋根を傷
 らすの事



名作
 橋本



主人

白糸

大八仁正金口車者三

一五

小太郎と引抱へ外面へ出らる其折柄旅装束せし一人の男門の外へ疾
 疾寄て小太郎と奪ひ取跡とも見ぞして逃行らる捕手の人
 と見て大支の人質奪ひ取りの彼奴丁を正しく主水あんと小鷹と
 捨置曲者が跡と慕めく追行らる小鷹と跡小只一人我子の支も
 らる夫の身の上気遣いと何思ひらん奥へ馳入男の姿も出
 編笠小鳥と隠し何池と指て走り行らる斯る夢の夢も知らん主
 水と白糸と俱小亭王が返答と待居て若我方へ身と贖ひる免や
 斯やあどべし又其支あらる時ふいふとべし杯を白糸を此
 支成し思ふに此方の様子と聞あ定らく彼方より急ぐ
 此身と贖ひ小末と其時ふ兼言如く此身の覺期あり居

まは最早休と斯語らる参らるる支も今宵限りあるべし杯を
 我連も休と殺して見て中あらるる免も角もあるとある共
 なく若此方へ贖ひ支あらるる密小此所と連退て頃く身と隠
 後ろ暗と業らるる共追て金子とけのいふ亭主小損失
 めるは是ら外小量簡みと様と高議あり居ら折柄
 俄小内の騒ぐ多勢の足音して二階へ上り来る中何支もやと
 思ひ居ら内回の障子と押明と身軽小出立捕手の人数双方より
 捕らとらると立もやと石をたりに投退てあ何故の狼藉あると
 くの狼藉と奇怪あり領主らの御誑らく召捕小向らる我ら
 手向ひあらい不敵し物まつとせと搦めととととと取巻と誓へ

領主の命あり共罪の子細も知らずと何条搦めらるると申すの跡
 小扣へ一討手の頭人罪の子細其方小覚へり人盜賊引利と度
 とする都築主水此家の亭主が訴人小うらと召捕ふ向ふら尋常
 小いまりと受と呼らうらと思ひも寄ぬ疑ひと蒙る物なる
 程の非道と働く主水小あはれ御尋の筋ゆゑ直々参つて申因ん
 たと領主の御証あり共縛を受申すと身拵して立上る白糸の甲
 斐々敷大小取く主水よと我身も俱く裾引上り錯るいと引と
 討手の頭人是と見て何の兎もゆき此終小見道とてとや夫召
 捕と下知小後い十手打振四方より打とかるると投退蹴のけ秘術とつ
 くと働ども回扱と座敷の内あま互ひよ働と自由ありと家格

子と蹴放ら白糸と引連と家根へ出まの捕手の人数つゞくと家根出
 くと共手並ふらと左右あはれ掛り得と此間小二人の大家根へ上り水
 りと中へ毎実の罪小縛りらと繩目の耻と受まると爰迄い出とと
 道まらとるも思ひまらと潔く腹くと切倫と俱ふ海底小身と沈ん
 用意ととつひとまらと白糸と是と聞我身と俱ふ死んと嬉と仰
 小侍ととも休と望とゆる身といふも爰と落のびと母御の仇とも討
 玉へ毒と爰小生害ありと後安くと落とへくと主水が腹指引被て生
 害あるととらととらと建も武運小尽ると主水あま中爰と落ん
 とと捕へらとらと死後迄の耻辱ありと俱ふ死んと用意ありと白糸押
 留死と一旦あくと安とと一先爰と落玉へと争ひ留る其内小討手

の頭人下知まゝ只一人の主水あつて取逃さるゝも人下の者共と驅
集り出口とて固りて指揮し後此家の亭主柏子木乱調打まゝ
下の者共驚き何事かと走り出く火変あらんかと橋本屋の門口
袂しと押掛り頭人下知して大吏の捕者手小余りて家根の上
追きり取逃さぬ中此家の四方を取囲む曲者と組苗よ手柄次第褒
義とよんと下知し後い血氣の者共面白く日頃の手並と頭し手
柄の程と見せ申さんと長摺子と家根へ押掛り鳥口或る六尺棒得物
くと引提り我組苗んと駈上まゝ主水白糸の兩人の海岸へ張出さる
客房の家根の絶頂小落と争ひ居り折折月の雲間と
出あさかり小見へ渡りぬは彼知居るを逃さると聲い小吐とる

ふぞ二人の山と四方と見らるゝいつの間小うの提灯松明星の如く此家の
四方を取囲む家根の上り究竟の荒男共込合り都築主水の是と
見く我一人と捕ん連つら仰ぐの有様や此体とて翼ありともものごと
出でさやうは連も運命尽る主水无益の殺生との思共責てもの思
ひ出小最期の際の一働と花を敷いて見せんとと刃の下緒と袷と目
釘と混して立ちまゝ白糸も諸共主水が腕指小脇より込甲斐と敷
も身構り只今未だに新午の者共主水が手並りまゝ知りを夫打
倒とくり小尻小我先と打ちかると動くと申らん突立て臨座よ
せと劣ての破落理とと薙倒せ先小進に血氣の者共七八人手と
負て家根より下へ轉び落り此勢の小恐とては後込るを措

子と持て打伏し中も力量勝る者長搭子と追取て打く懸る
と身とに搭子の先と引つゝと捻倒んと操合しと打て突
放る力余りく彼男の家根より下へ突落さん此搭子の拂ふて
傍りの者共俱に大地へとうと轉ひ落家根の上一人も居らばして
寂の四方を取囲み只声々に罵の都築主永は是と見て今早見追
たりとく生害あると心静不用意を其れ一人の捕手半子
携へ後の方より忍びより匍匐して既小切て放さんとせし折柄編笠深く
冠り侍後の方より頭を出抜き見と彼者と後ろ袂深小切く
落しとらま何者あると思し中静小する一歩行と来て編笠を取
と能見まといふ小主水が妻の小鷹をうかうく爰へ来りやと

同(ハ)毒が夏に如此くと詞短く委細と語りて鬼も角も陰爰に
て果玉と失ひ玉の御朱印の誰が詮まし女御の仇を誰討だとも
其れ小むを付玉ととらば夫知らざるゆゆゆも斬入る事
巻くまむ羽翼ある共落しとらばその毒小任せ此囲を解て泰
らんと四方小響けと声高く討手の人くらく聞け都築主水が魚
実の災難ゆふととの手小合とら然と去るが運尽て道より
道ありまむ潔く生害あると能見置て汝水が運尽し時の手小
せし乳の下と切ら此体と見く白糸を毒も小負をせしと同
声と張とて橋本屋の白糸王水ゆと諸共小此所く主害
は屍を藻屑と成共名の末のせ小残しあん誠と同一女の節義

うと女遊びと下号を呼ぶくく腕指咽へ突まゝのホら出くはくう
 白糸どの夫と思ふ心の誠を休も妻も替りいせと互ひの手不手
 と取りり海へお父と俱く小浮名の爰も流せとと夫へ立ち貞標
 適ぐと女の鑑なり又其内が庵忽の過ち小鷹を爰も補あり
 此体見ろく捕手の人くスウ海へお入りを死骸あり共引上くと皆
 船もお棄て海へ漕出まゝお返をいひて静りり都築主水の
 眼前も小鷹と白糸が最期と見て我の生て何うを俱く死人と思ひ
 二人の者が諫らひ尋ら宝も其終小女の仇とて討どして爰も死ん
 不忠不孝又母の爲りの妻子と忘る其本文を爰もさくうと我と
 我心と諫ら哀と跡も寝くくと闇も紛まてく去去と

